
Ideal reality

詠陸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I d e a l r e a l i t y

【Nコード】

N 2 2 8 5 G

【作者名】

詠陸

【あらすじ】

もしも願いが叶ったら——そんなお話です。そんな内容に見えないような日常風景ばかりのところもありますが、見守ってやってください。

Act・0 - プロローグ -

いつも、どこから吹いてきた風。
それが、どこか、懐かしかったから。
僕は、歩き始めたのかもしれない。
どこに続いていくのかさえ、わからない道を。

―朝。太陽が眩しいから、きつと、朝なのだろう。
目を開けて、体を起こす。

時間は、ちょうど7の刻を少し過ぎたくらいだった。
うん、朝だ。

「今日は朝から忙しいから、早いとこ食べちゃってね」
リビングに下りてくると、お母さんはそう言いながら食器を洗っていた。

「ホラ、感謝祭の準備よ」
「うん、わかってるよ」

僕の住んでいる町―港町「レーヴェ」。

大陸から突き出た半島に位置する国で、地形上、周りの三方は海に囲まれている。

そのため、やっぱり水産資源が豊富だ。

町は水路で区切られていて、あちこちをゴンドラが行き来している。
そんな水に助けられ、水と一緒に暮らしている国だから、

レーヴェでは年に一回、「レーヴェ 水の大感謝祭」が開かれる。

その二週間くらい前からは、学校も休みになって、国ぐるみで感謝祭の準備をする。

だから、最近の首都 アルカは、とても賑やかだ。

今日もそんな準備日のうちで、だから僕も朝から出かけて、感謝祭の準備をしに行く、ということ。

そんなことを思い出しているうちに朝ごはんも食べ終わったので、そろそろ出かけることにした。

「美味しかった。行ってきます」

「うん、行ってらっしゃい。私もカージガも後から行くから、伝えておいて」

「はい」

セシルさんに伝えておけばいいだろう。

そう思つて、家を出た。

家から、徒歩で5分くらい。

アルカの大広場に到着。

中央に大きな水の精霊【ウンディーネ】を奉る石碑が建っている広場で、もういくつもの出店やアトラクションが並び始めている。

…気が早くないかな？

とりあえず、セシルさんを探して、お父さんとお母さんは少し遅れる、ということを伝えると、

「ああ、OK OK。じゃあ、とりあえず手伝ってくれるかい？」

あっさりOKされちゃったけど、いいんだろうか。

「ええ、そのために来たんですし」

「頼もしいね。じゃあ、この木材そちに運んでくれるかな？」

ええ、もちろんかまいませんよ。学校の代わりみたいなものですから。

実際に持ってみると、見た目とは裏腹に重かった。

でも、もてない重さではなかったので、抱えたまま指定された場所まで持っていった。

「えーと、コレどこにおいておけばいいですか？」

「ああ、その辺に適当にほっぽつといてくれ。後は何とかするから」
「わかりましたー」

やっと木材を下ろして、一息、

「おー、レイル！やってるな」

…つく暇さえなかった。

「…キミたちも仕事しなよ、シアン」

シアン達とは小さいころからの友達だ。いつも5人で集まって遊んでいた。

何をするわけでもなく、ただ集まって遊んで喋って馬鹿やって。

そんな、日常風景。

それは今も変わらずに続いていて、今日も今からそれが始まるようにしているわけだ。

「仕事？せっかく学校が休みなのに、あくせく働いてられつかよ、なあリイ？」

リイも大きくうなずいて、

「全くね。何のために学校が休みになつてると思ってるの？」

と、ピンクの髪をさらつ、とはらった。

でも悪いけどね、準備のためだよ。

「まあ、それはいいとして、シアンとリイだけ？ ゼストとリリアは？」

三人しかいないっていうのもなんか久しぶりだ。

「ああ、あの二人は多分寝てるよ」

「昨日も勉強で大変だったんだって。よくわからないわね、天才っ

て人種は」

まあ、それもわからなくはない。

ゼストとリリアは、僕達の中では一番頭がいい兄妹だ。いや、学校の中でも、ズバ抜けてると言っていいくらい。

そんな二人が、何で僕達と一緒にいるのかはわからないけど、それは多分二人の人柄だろう。

「まあ、きつともうすぐ起きて来るよ。それより」

赤毛の幼馴染は悪戯っぽく笑って、

「ホラ、行くぞ？」

と、僕に手を差し出した。

「え、でも仕事は？ 手伝いしなきゃ」

言いかけたところで、リイにぴしゃつと止められた。

「馬鹿ね。私みたいな可憐な乙女が力仕事なんてできるわけないでしょ？」

「それダウトな。そんな乙女なんて清楚な生き物、少なくとも今ここにはいない」

シアン、全面的に同意するよ。あと、力仕事だけじゃない。

「二人ともなによ？ 私が乙女じゃないなら誰がそうだって言うのよー！ 花も恥らうのよ？」

ゴメンね、もう何を言ってるのかわからない。

僕が対応に困っていると、シアンは

「ああ、それなら化身みたいなのが後ろにいるぜ」

さもありなん、といった感じでリイの肩の向こう側を指差した。そこにいたのは、間違いなくリリアとゼストで。

「…皆さん、何の話をしていたのでしょうか？」

彼女は、ただ、そう言った。

「…負けたわ」

途端、がつくりと膝をつくりイ。いや、勝敗基準がわからない。

「え？ え？ 私、何に勝ったのですか？」

「さあ、わからないけど勝ったんでしょ？ 喜んでいいよ」

いや、リリアもリリアだけどゼストもゼストだなあ。とりあえず状況を知らうよ。

「ええ、私は負けたのよ。思う存分喜びなさい」

「なんだか知らないですけど、じゃあ…嬉しいな」

瞬間。

「やっぱりっ！私じゃ、リリアには勝てない…」

さらに崩れるリイに、

「いや、いまいち状況がわからないんだけど…」

と、ゼスト。うん、その感想が正常だよ？ さっきと意見が変わってるけどね。

「まー、その辺の話も全部含めて」

ギヤーギヤー言ってるリイをなだめるようにしながら、シアンが話し出した。

「ど？せつかく学校も休みなんだし、【アジト】で」

だから仕事があるっていつてるのに。

「決まってるだろ？ バックれるそんなもん」

え、でも、そんな、いいかけたとたんに、

「いいわね。決着つけましょう」

「ええ、何をかはわかりませんが」

「うん、何の決着かはわからないけど…面白そうだね。ね、レイル？」

次々と賛成された。こうなるともはや、いくら反対したって無駄だ。

「じゃあ、決まりだな。一番遅くなったやつ罰ゲームね」

言うが早い、シアンは走り出した。

「あ、ズッル！ちよっ、待ちなさいよ！」

甲高く叫んでから、リイが続く。

残された僕達は、顔を見合わせてから、走り出した。

何か、いろいろ間違っている気はしたけれど。

とりあえず今は、古ぼけた時計台を目指して走った。

Act・1 - セブンスデイ 1 -

町外れの、古びた時計台。

もはや時計は止まり、誰も足を踏み入れることのなくなった、煤けた塔。

そこが、僕たちの【アジト】。

一応そう呼んでる。

シアンが言い出して、みんなで少し掃除して。

それだけで、僕たちの立派な秘密基地。

そんな経験、あるんじゃないかな。

「ってコトでー」

なんとなく眠そうな二人に罰ゲームって言うのも悪い気がしたので少し遅れてアジトにつくと、

シアンが満面の笑みを浮かべて待っていた。

ほかの三人は、なにやら話し込んでいるようだ。

リイに可憐さはー、とか、気品って何よ、とか、そんなのだけで決まっちゃうの？とか。

…ああ、さっきの続きか。

「ちゃんと空気読んでくれてありがとな、レイル。さすがに眠気漂うあの二人に罰ゲームは無理だぜ」

「いや、なんていうか、さ」

曖昧に返す。

「さっすがだぜ。まー、罰ゲームは課すんだけどな」

あー、うん、やっぱりそうなんだ。

「で、何すればいいのさ？」

みんなの罰ゲームはいつも軽いものばかりだったから、半ば諦めて聞いてみる。

「んー、そうだな。さっきの出店で、なんか冷たいもの5人分。多分少し前からでも実験的に店回してるさ」

それ、パシリじゃないか。

しかし僕の抗議もむなしく、

「あ、じゃああたしオレンジジュース!」

「えーと…じゃあ、私はアイステイーで」

「うん、僕は、そうだな…カフェオレでもお願いしようかな、ミルク抜きで」

ゼスト、それ、コーヒって言うと思う。

奥でなにやら話し込んでいたはずの三人が、当然のように注文してきた。

「そーいうことだ。まあ、諦めていつて来い。ちなみに俺ミックスね」

はいはい、わかりましたよ。

町の中心部に戻り、手頃な出店を探す。

と、ちょうど良さそうな飲み物屋を見つけた。

カウンターには、女の子が一人。営業してるって思っていていいんだよね。

「えーと、すみません。オレンジジュースとアイステイーと、アイスコーヒーとミックスジュースをひとつずつ、」

あ、僕は何にしようか。

「後は…じゃあ、ミルクティーお願いします」

しかし、意味不明な品揃えだな。何で注文の品が全部あるんだ？ミックスジュースまで当ててくるとは。

そう思いながら注文を終えると、カウンターの女の子は一言、
「…ブレンド？」
とだけ呟いた。

「…え？」

意味を理解するのに少しかかった。

「あ、いえ、すべて別に。」

「…了解。」

しばらく待つと、注文どおりに飲み物を載せたお盆を渡された。

「後で返しに来て」

「あ、はい」

お金を払って店を後にしたけど、なんていうか不思議な子だったな。
…後多分接客業には向いてない。

【アジト】に戻って来てみると、何か騒がしい雰囲気。

「だーかーらー！あたしの辞書に不可能なんて文字は載ってないの
！」

「へー、じゃあその辞書不良品だな」

「…ッ！ シアンはいつもああ言えばこう言うんだから！もー、話
そらさないでよ！」

リイとシアンがなにやら騒いでいた。

「…二人とも、楽しそうだね」

「リリアにはそう見えてるのかい？ なら、なるべく早く医者に行
ったほうがいいかもしれないね」

リリアとゼストは傍観者気取りのようだ。

何を言っているのかは気になるけど、僕は一応「買ってきたよ」と
声をかけた。

途端。

「あー！ レイル！ 聞いてよ！」

こっちが何か聞く前に、リイのほうから飛びついてきた。
とりあえず飲み物を置く。

「で、今度はいったい何なのさ？ さっきの続き？」

「あー、気にすんな」予想外に、シアンはぴしゃつと言。

「リイのはかない夢がひとつ、終わったただけだ」

「まだ始まってすらないわよっ！ あたしね、なんかスッゴいこと
するって決めたの！」

乙女がどうやらってのはもういいんですか。

「あ、それは、うん。さっき決着ついちゃった」

あたしじゃ無理なのかも、とリイは微かに笑う。その横顔が、少し
寂しそうで。

「さっき、最初のほうちょっと聞いてたけどさ」
思わず、口走っていた。

「まあ、清楚、可憐、上品だけが乙女じゃないし。リイはリイの
やりたいように、ね？」

「え…あ、うん。ありがと」

予想外の返答だったのか、リイが少し戸惑ったようにも見えた。

でも、まあ『なんかスッゴいこと』に関しては、何もいえないけど
ね。具体性ないし。

「う…まあ、その辺は何とかするわよ」

できるといいけどね。多分すぐに忘れちゃうんだよな。
と、

「漠然としてるなあ。何だっけ？ ゼスト」

シアンが横槍をはさんだ。

「何って、例えかい？ だったら、『曖昧模糊』が妥当かな」

ゼストは考えるそぶりも見せず、コーヒーをすすりながら言ったの
けた。

「そ、それだ。それはいいとして、ま、今日は何の意味もなくここ

にお前ら呼んだわけじゃない。なくても呼ぶけどな」
話し出すシアン。

「ま、スツゴいことにせよ乙女にせよ、ほかの何にせよだ。神頼み
つてのも悪かねえ」

そういつてシアンが僕達に見せたのは、

一冊の、古びた本だった。

Act・2 - セブンスデイ 2 -

少し埃を被った、古びた本。

それを目の前に、シアンは楽しそうに話し出した。

「この前、古本屋で見つけたんだけどな。まあ、ちょっと見てみてくれよ」

それは、どうやら古今東西の色々な伝説や神話、果ては迷信までをまとめた本のようなだった。

わかりやすいところではクリスマスとか。

「で、俺が目え付けたのはコレ！」

本の中ほどのページを開く。

『七夕』

「ん…これ、なんて読むのよ？」

「いや、わかんねえ。でも、下に対訳も乗ってるからよ。ま、細かい字についてはわかってないらしいけど」

その内容は、ざっとこんなものだった。

『遠い異国の地に、夏のちようどはじめごろに人々が夜空に願いをかける夜がある。どうやら、それは昔から伝わる伝説で、名を「七夕」というらしい。神話の導くとおりに、二人の神に願いをかける運がよければ、星が願いをかなえてくれるらしい。』

色々間違ってる気はするし、随分端折ってしまったけど、文の大意はこんな感じだ。

「へーえ、面白そうじゃない！」

真っ先に目を輝かせたのは、リイだった。

「願いがかなっちゃうなんて、ロマンチックでいいわね。うん、面白そう！」

「だあろ？ …なあ、こいつ、皆でやってみないか？ 皆、明日くらいまでに願い事考えておいてくれよな」
しかし、全くいつも強引だなあ。

「じゃ、後は各自解散でもいいけど…せっかくだし、少し皆で遊んでいくか」

「ふう…」

結局遊び飽きるまで皆で何をするともなく遊んだ。シアンの言うこととはいつも突拍子のない、思いつきのことが多かったから、いつも皆で楽しんで振り回されてる。

だから、今回も僕達は付き合うことにした。

その、七夕ってやつに興味がないなんていったら嘘になるし。

あ、でもその前に、お盆返しにいかなくちゃね。

さっきのお店を探しに行くと、出店はたたんだわけでも、移動したわけでもなかったのですぐに見つかった。

「美味しかったです。ありがとう」

お礼を言って返すと、

「また、どうぞ」

心なしか、彼女が少し微笑んだ気がした。
と、

「あ、アージュ？ 今あいてる？」

奥から声がして。

「…今行く」
アージュと呼ばれた女の子は、やっぱり短く返して、
「いずれ」

不思議な言葉を残して、走っていった。

家に帰ってからは、願い事について考えていた。
いつも何かを願っているわけじゃないから、いきなり「願い事」って言われても、思いつかない節はあるだろう。
でも、今、この瞬間を大事にしたかったから。
願いは、迷うことなく決まった。

□

「おーし、皆集まったな」
次の日、【アジト】に集まると、シアンがそう切り出した。
…っていうか、全部忘れちゃってたけど、仕事。
「ああ、それなら大丈夫だぜ？ …多分」
多分、が気になるけど、続きを聞こうか。
シアンは、時計台の壁に文字を書きながら説明を始めた。
「OK。で、昨日の続きなんだけど、願い事は『短冊』ってのにかいて『笹』ってのにするらしいんだ。」

へえ、また随分と意味のわからないことを。

「ける…いす？ にかいえ、って何よ？」

「異国の字は読めないけど… 多分違うと思うんだ」

「そ、そんなことないわよ！ きつとあってるわよ！ ゼスト、いい気になってない？」

はい、そこまでね。

「だから、ほれ。とりあえず読んで作ってきた」

シアンがなにやら長方形の紙を配ってくれた。

ここに願い事を書けということらしい。

しかし、

「シアン、でも、ここにはその、ホラそのそれ、なんて読むんだろう？」

ゼストが『笹』の字を指差すと、シアンは

「ああ、問題ない。いいトコみつけたんだ、昨日」

当然のように返す。

まったく、抜かりがない。

「でも、やっぱ俺はコレだな… 『日常に新しい何か』。」

皆が少し黙って考えていた中、唐突にシアンが喋りだした。

「漠然としてるわね… 『新しい何か』って何よ？」

「いや、何か面白い事起きないかなって。『異世界』でもいーしさ、

『魔法』とかでもいーしさ、ちっちゃな事件でもいーや」

いや、そんな適当なものでいいの？

「いーんだよ、アバウトで。リイ、お前は？」

いきなり話を振られたリイは少し悩むようなしぐさを見せてから。

「なんかスッゴいことやりたいなー… とかでいいの？」

「ああ、リイはそれでいい」

頷くシアン。その目は次に、ゼストとリリアに向けられた。

「え…あ、僕？ 僕は…そうだな。更なる知識…とか」

「うーわ、流石ゼストって感じたな。リリアは？」

「私…ですか。…えーと、努力の価値が、もう少しだけわかってもらえる世界…。どうでしょう？」

「リリアらしいな」

シアンは、そう、つぶやいて。

最後に、僕のほうを見た。

「で、お前は？ まあ、少しは想像つくんだけどな。どーせ、『シアンがもう少し静かになったら』とかさ、『リイにおしとやかさがほしい』、とかさ」

「んーん、違うよ」

っていうか、何で僕の願っただけ身内、しかも僕以外限定なのさ。

そう言っつて、僕がシアンに見せた短冊には。

『できるだけずっと、皆で一緒にいたい』

昨日の夜に書いた字が躍っていた。

へー、とかふーん、とか、色んな感想がもれる。

その後シアンは、

「ここ、『できるだけ』ってのは気にいらねえな。『絶対』なんだから。消しといたほうがいいかもな」

と、笑いながら言った。

「で、シアン。その、その代わりってのは、何なんだい？」

僕が短冊を書き直し終えた後、ゼストが聞くと、

「ああ、じゃあ行こうぜ。ついてこいよ」

シアンは【アジト】の窓から飛び降りて、走り出した。

「…やれやれね。脈絡ないんだから」

「まあまあ、リィ。それがシアンなんだよ、きっと」

「そんなこと言って、今少し憂鬱でしょう？お兄ちゃん」

各々、そんな風につぶやきながら。

僕達も、シアンの後を追った。

世界は、まだ動かない。

Act・3 - セブンスデイ 3 -

「町のはずれに、一本の大きな木がある。

いつからそこにあるのかすら解かってない、

『伝説の大樹』ってやつだな。」

僕達の少し前を歩きながら、シアンが話し出す。

「で、今回はその神樹に、願いをかなえてもらおうってわけだ」

「願い事はいいけど、さっきから歩き通しよ？ いつになったら到着するの？」

さすがに女の子だからだろうか、少し疲れ気味のリイに対して（リリアはとっくの昔にダウンしてる）、

「もう見えてくるぜ」

言いながら、少し走り気味に振り返る。

その後ろに、巨大な、としか表現できないような樹が、立っていた。

『世界樹』という表現が、一番適切だろうか。

上は何キートあるのかわからないくらい高く、青々と茂った葉からの木漏れ日がまぶしい。

確かに、僕達の願い事くらいなら簡単になんてくれそうなくらい、その樹は、

神々しかった。

「神秘的…な、樹ですね」

遅れて到着したりリアが思わず、といった具合にもらしたので、

「うーん、確かに願い事くらいなら叶っちゃうかもだね」

とりあえず、そうあわせてみた。

「だあろ？じゃあ、ここに願い事飾ろうぜ」

と。

「おや、こんなところに来客なんて久しぶりだね」
樹の後ろから、声が聞こえた。

「ここ、目立つ割に誰も来ないんだ。2ヶ月ぶり、くらいかな？」
そう言いながら出てきたのは、一人の男の人だった。

20代の後半くらいだろうか。

すらりとした長身で、黒いショートヘア。
どこか、不思議な雰囲気をもった人が、微笑を湛えてそこにたっていた。

「あ、自己紹介が遅れたね。私・ルーファスって言うんだけど。この番人、見たいなものかな。ああ、番人って言っても、樹に登ろうとして落っこちたりする子がいないか、見てるだけなんだけどね」と前置いてから、誰に言われるともなく、彼は話し出した。

「ちょっと昔、友達と交わした約束があつて。それ以来、ここで彼らの帰りを待つてなきゃいけないんだ。…君たちは？ 今日は何をしにきたのかな？」

初めて会う人に話しかけられたとき、僕なんかは少し話しくく感じることもあるんだけど、

「ああ、この、『七夕』ってやつ、試してみたくてさ。あんた、何

か知ってるか？」

これがシアンの特徴。誰にでも分け隔てなく接することができる。悪く言えば、礼儀を知らないわけで。

「うん、聞いたことならあるけど？ 確か、東の末端の異国の風習だったよね。試してみる、って言うのは？」

でも、そんなこと微塵も気にしていない様ににこやかに返すルーフアスさん。

「ああ、皆で願い事書いてきたんだけどさ。その、『笹』の代わりにここに来ただけだ」

なるほど、とルーフアスさんは呟いた。

「それはいいチョイスかもしれないね。見てのとおり、この樹は『神樹』。神樹・レークインって名前さ。」

お願い事くらいなら、神の力でかなえてくれるかもね、と続けてから「どうかな？ 良かったら、君たちの『願い事』、教えてくれない？」

と、持ちかけた。まあ、それが当然の流れかな。

僕達がそれぞれ短冊を見せると、ルーフアスさんは一枚一枚を見ながら

ふーん、とか、面白いね、とか、一つ一つの願い事に感想を言ってくれた。

シアンの異世界の短冊を見たときには少しびっくりしていたようだけど、

誰だってそういう反応になるだろうな。

「うん、面白かったよ。皆、個性的で」

一通り見終わった後、ルーフアスさんはそう言って短冊を返してく

れた。

「でも、特に…その、異世界？ それは面白そうだね」
「そうだろう？ 俺は、日常に新しい刺激がほしいんだ」

そう言っつて自慢げに振り返るシアン。
うーん、眩しい。

「よし、じゃあ、願いをかけようぜ」
そう言っつと、シアンは自分の短冊を樹のふもとにそつと置いた。
そして手を合わせると、

「ホラ、お前達も！」
シアンに倣っつて、僕達も手を合わせると。

「その短冊は、置いていったほうがいいかもね」
とルーファスさん。

「そんなにすぐ願いは叶わないさ。せめて、一日はまたないとね」
「それもそうだな。ありがとな、あんた」
言っつが早いか、シアンは駆け出して。

「お前等早く着いて来いよーっ」
声だけが響いてきた。

「あの、いろいろお世話になりました」
とりあえず、立ち去る前にルーファスさんにお礼を言っつておくことにする。

「いや、私も楽しめたよ。何せ2ヶ月ぶりのお客さんだ」
「そうですか、なら、良かったです」

「ふふ、君は礼儀正しいんだね…それより」

と、ルーファスさんは声を潜めた。

「あの、元気な男の子。彼は、どうやら一人で走ってしまう傾向があるみたいだね」

「あ、シアンですか。そうですね、ちょっと困ります」

「シアン君っていうのか。いい名前だね」

そこで一瞬言葉を切ってから、

「君が、彼をちょうどよく抑えてあげるといい」

そう囁いてから、ルーファスさんは樹の根に寄りかかるようにしてしゃがみこんだ。

「少し休ませてもらおうかな…はしゃぎ過ぎたみたいだね」

「あ、はい。お気をつけて」

もう一度お辞儀をしてから、僕もシアンを追いかけた。

夜。

辺りは暗闇に落ち、冷たい風が吹き抜ける。

私は、目を覚ました。

どうやら、あれからずっと眠ってしまっていたらしい。
あの、2ヶ月ぶりの客人が、帰ってしまってから。

「私らしくもないな」

呟いてから、足元の短冊を拾う。

手元には、5枚の紙切れ。

まさか、この紙切れが、すべてを変えてしまうなんて。
誰が、想像するだろう。

だからこそ、彼らは。

何のためらいもなく、

願いを、空にかけることができるのだろう。

「でもね、シアン君。願いが空に届くのは、『夜』だけなのさ」

言い聞かせるように一人ごちて、私は短冊に目をやった。

異世界やら、英知やら、笑顔やら。

今回の客人は、かなりユニークな願い事を残していた。

1年前とは——80年前とも。

彼らは、何かが違った。

純粹に、叶えたい願いがあつて。
いや、違うな。

漠然とした、『願望』があつて。
それを、ただ、ぶつけられる。
それだけだ。

「だが…まあ、それも面白いさ」

年をとると独り言が多くなって困るな。
これもまた、独り言なわけだが。
そう思つて、顔を上げる。

神樹の番人― その言葉に嘘はない。
だから。

友との、約束だから。

私を縛る、制約だから。

今までは、ただ、それだけで動いてきた。

でも、

今回は。

楽しめそうだよ、レイル君。

「さあ、始めようか…『レークイン』」

『世界樹』が、青白く光った。

Act・4 - アウェイクン 1 -

目が覚めた。

もやがかかる意識の中で、思い出す。

「そっか、昨日は、ルーファスさんに会って…」

ひとしきり話をした後で、お願い事を供えて。

皆で町に戻って、少しだけ感謝祭の準備を手伝って。

それで、帰って来てからは疲れのままに、そのまま寝ちゃったんだ
ったつけ。

体を起こして、伸びをする。

「…痛たた」

首を回すと、少し痛む。

昨日は、久々にあんなに走ったからかな。

と。

「レイルー！ まだ寝てんのかー？」

窓の外から怒鳴り声がした。

窓を開けてみると、そこにはお馴染みの4人が並んでいて。

「昨日の樹！ 見に行くからな、8の刻までに降りて来ること！」

時計を見るとあと10秒で8の刻だった。

「遅せーよ、3分の遅刻だ」

「いや…僕、世界記録…ぶっちぎる速さで着替え…てご飯食べた、

と…思うんだけど…」

3分だよ、3分。

「ええ…確かに、凄い早さだったと思いますけど…」

リリアが救いの手を差し伸べてくれたが、

「ま、遅刻は遅刻だから。また飲み物、後で頼むな」

そう命じてから、シアンは『レークイン』に向けて走り出した。

「やあ、良く来たね、うれしいよ」

レークインにつくと、ルーファスさんが迎えてくれた。

どうやら神樹の番人というのは、あながち嘘でもないらしい。

友達を待っている、といった。

どんな理由で誰を待っているのかは解らないけど、

彼の目は、少し寂しげに見えた。

二ヶ月ぶりの来客だからかな。

そんなことを考えていると、

「なあなあ、で、結局どうだったんだ？ 願い事」

シアン達がルーファスさんとはなしていた。

「そうよ、あたしのでっかいことするって夢は？ どうなるの？」

「いや、それはちょっと抽象的過ぎるよね」

と、ルーファスさん。

「まあ、叶わないとは言わないけどさ。気長に行こうよ」

「まあ、そうね。そんな簡単に叶っちゃ夢は詰まらないわ」

何故か得意そうに言うリィ。

納得したのか、近くに座り込んで風に髪をなびかせた。

それを見計らったかのように、シアンは僕を呼び寄せた。

「ルーファスさんにも何か買ってきてやってくれよ。お茶とか好きそうだよ」

「ああ、うん。飲み物だよな」

うなずいてから、僕はさつきとは逆方向に走り出した。

Act・5 ・アウェイケン 2・

昨日と同じ場所に、出店は立っていた。

店番の人は、昨日とは違う女の子。

「すいません、オレンジジュースとアイスティーと、アイスコーヒ
ーとミックスジュース、後ミルクティーをひとつずつと、アルカン
ティーお願いします」

相変わらずの品揃えのよさに感心しながら注文を終える。

「はいよー、ちょーっと待っててね。あ、ブレンドでいい？」

「え、あ、いえ、別々に」

「りよーかいっ」

んー、何でそんなにブレンドにこだわるんだろ。営業方針なのかな。

お盆を持って、店を後にする。

気持ち早歩きでもと来た道を戻る途中、少し見慣れないものを見た。

背の低めのお爺さん…なんだけど、

皮膚が、っていうか体全体がうつすらと緑色。

明らかに健康じゃなさそうな顔色をしたそのお爺さんは、

僕の姿を認めるとこちらに歩み寄ってきた。

「ちよいと、そこの少年」

「…はい」

少し怖かったけど、とりあえず返事をする。

「わしはこのあたりはあまり詳しくなくての…この町にパン屋はあるかの？」

うーむ、普通の質問なんだけど、少し違和感を感じるのはやはりその緑色のせいだろうか。

「あ、えーと……この先の道をまっすぐ行って、二つ目の角を左に曲がった先です」

「どうもありがとうございます」

そういつて、お爺さんは去っていった。
僕も、早い所戻ろうかな。

少し早足で、『神樹』の下に戻ると、
シアンが走り寄ってきた。

「お、レイルにしては遅かったな」

「ん、ちよつと道聞かれちゃった」

答えて、飲み物を手渡す。

「お、サンキュ」

コップを受け取ると、シアンは『神樹』を振り返った。

「神の樹、ねえ。そう言われるとなんだか神々しく見えちゃう、な」
そう、軽く、呟いて。

「……ホラ、皆が待ってるぜ」
いつもの笑顔に戻って、走り出した。

「うーん、ロマンがあって楽しそう！ やっぱり、良いわよね、そういうの」

「…リイ、一応聞くけど、女の子だったよね？」

「あら、おかしいわよお兄ちゃん。そのメンバーには、女性の方もいたんでしょ？」

皆のところに戻ると、リイたちは何か話し込んでいた。
飲み物を手渡しながら、聞いてみる。

「はい。…何の話？」

「あ、ありがと。えーとね、ルーファスさんがお話を教えてくれたの」

「ああ、君たちも聞きたいかい？ ……ある、旅人の物語だよ」

そう言って、ルーファスさんは本を広げた。

□

——ある、古びた本に載っていた寓話だよ。

ちょうどこの町くらいの所にね、6人の科学者が住んでいた。でも、その当時の科学って言うのは、そう、どっちかって言うと哲学に近いものだったかな。

彼らが研究していたのは、人の『心』と『願い』について。

こんなに沢山の人がいるのに、なんで心は一つ一つ違うのか。

何で、人は『願い』を持つのか。

それを、彼らは知りたかったんだね。

でも、やっぱりそんなことはいくら考えても簡単にわかるものじゃないから――

その人たちは、最初に自分の願い事を考えることから始めたんだ。ただ純粹に、単純にその時自分が考えた『願い』に向かって歩いて見れば、

答えが見つかるんじゃないか、って考えたんだ。

目的は違えど、今の君たちと同じように。

5人のメンバーはそれぞれに散らばった。

ひとりで願いをかなえようとする人もいたし、

何人かで手を組んで目標に向かっていく人もいた。

自分の純粹な『願い』事に向かって走る原動力を見つけるために。

□

「…で、ここまで話したところで、君たちが帰ってきたんだ」

本に琴を挟んで閉じ、お茶を飲むルーファスさん。

「へえ…なんというか、綺麗なお話ですね」

願いを求める姿が、いつまでも子供心を忘れていないようで。

すると、横にいたシアンが口を開いた。

「それよりも、だ。…その続き。どうなるんだ？」

軽くうなずいてから、ルーファスさんはもう一度本を開く。

「この本の限りだと、それからもう500年は経ってるんだ。でも、そのメンバーの誰かがこのような形に何かを残したって言う記録はない」

「…え、何も残ってないの？ そんなの、可哀想じゃない」

「確かにそうかもしれないね。だけど彼らは、人知れず町を去った。納得のいく結果が出なかったんじゃないかな。そして」

ルーファスさんは、『神樹』を仰ぎ見て。

「その出発のときに、この樹が植えられたそうなんだ」

と、締めくくった。

…

…

…

「——よし、今日はこの辺でお開きにしようか。ご家族が心配する」
その後は他愛もない話に花を咲かせ、あたりがすっかり暗くなると、

ルーファスさんはそう言って立ち上がった。

「私もそろそろ少し休むでしょう…楽しかったよ」
そして、彼は樹の後ろに姿を消した。

「…よし、帰ろ！ お母さん達待ってるかも知れないじゃない！」
リイとシアンが真っ先に駆け出し、僕達も後を追った。

「おかあさん、おとうさん、へんじしてよ、ねえっ！」

幼いあの日。わたしの、忘れられない思い出。

「ねえ、こんどいつしよにあそびにいくっていったじゃない！おきてよ、おきてよ……」

何もかもが闇の中に堕ちて行った。何も考えることなどできなかった。

「……うつ……ねえ、おかあさん……ひつく……おとうさん……ぐすっ……ねえ……」

わたしが、心を閉ざしたきっかけ。10年前の、あの日。全てが、あの日を軸に狂いだした。

「……！いい加減に起きなよ！」

急に視界が真っ白になる。

目を開けると、まだ昼だった。

どうやら、少したた寝してしまっていたようだった。

「もー、疲れてるの？無理しちゃダメだよ？」

「……大丈夫。少し……気を抜いただけ」

「気を抜いただけ、って……気を抜いたら寝ちゃうんだ」

「昔からそう」

言って、立ち上がる。

すると直後、肩を掴まれてまた椅子に座らされた。目を落とすと、机の上にコップ。

「へへ、飲みなよ」

「…嬉しいけど、いいの？」

「まあ、大丈夫でしょ？ …多分。私も飲むし」
「なら、いいかな」

コップに口をつけて。

楽しそうに笑いながら話す彼女を眺める。
適当に、相槌を打ちながら。

—

「おい、来てやったぞ。俺にも茶、出せよ」

「べーだ。あんたに飲ませるお茶なんてないよっ」

「おいおい、そりゃねーだろうよ」

…

「こんにちは、今日も良いお天気ですね」

「ええ、もっと続くといいんですけど」

…

「やつほ。どう？ うまく行ってる？」

「上々」

「まあ、悪くないね。そっちは？」

「えへへ、結構凄いのよ」

いつもの、皆の、かけがえのない顔を見ながら、考える。

もう、二度と失いたくないから。

もしも願いがかなうなら、私は。

笑顔を守る、力がほしい。

いつもと少し違う目覚め。

何故なら、その日朝早くから押しかけてきた客は、僕の予想とは、ぜんぜん違う人だったから。

「おい、レイル！大変だ、大変なんだって！」

頭が冴えてきたと思ったら、窓の外から呼びかける声。

皆で来てるのかな、と思って窓を開けてみると、

そこにいたのは、ゼストとリリアだけだった。

いつもとは違う何かに、少し身構えながら降りると、ゼストは凄い勢いで話し出した。

「あのな、いいか、落ち着いて聞いてくれよ、今朝起きてみたら、枕元に一冊本がおいてあって、いや、そんなことはどうでもいいんだ、それよりもシアンが、いや、今はどっちかって言うところの世界について話さなきゃな、願い、そう、願い事だ、この世界に願いが、シアンの願い、ああそうだった、シアンが、いや、シアンって言うたら」

「落ち着いてお兄ちゃん」

いつになくべらべらと、間に読点すら入れずに喋るゼストを、リリアが軽く静止した。

「レイル、とりあえず、落ち着いて聞いて欲しいのは確かなの。

…いい？」

【神樹】に向かって走りながら、耳はリリアに傾ける。

「え…って、言うことは」

「そう。今、まさにその最中らしいの」

「いや、でも、そんな…バカな…」

話は頭に入ってる。

でも、入ったその頭が否定して。

そんなことがあれば、楽しいはずなのに。

嬉しいはずなのに。

現実を、肯定してくれない。

そんなことが、あるはず無い。

転がり込むようにして、神樹の元に到着。
するとそこには、先客が居た。

「よ、レイル。相変わらずのお寝坊さんかよ」

「ほんつとよね。人生の四分の三は寝てるんじゃないかしら」

煌々と、不自然なまでに光る『レークイン』の前に立つ、二つの影。

「そんなの…癖だもん。仕方ないじゃん」

呟くように答え、奴らと肩を並べる。

すると。

五人が並ぶのを見計らっていたかのように。
樹の後ろから、影がひとつ、現れた。

「……君たちの、『本当の願い』は……一体、何なんだろうね？」
優雅に、気高く。

「予想外だけど、今夜の宴には、招かれざる客も居るようだ」
ゆっくりと、思わせぶりに。

「……ようこそ、『夢』の、『叶った』、」

「『世界』に。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2285g/>

Ideal reality

2011年1月2日02時50分発行